

「拾遺和歌集」の「詞書」の語彙について

一

本稿は、第三番目の勅撰和歌集である「拾遺和歌集」の詞書・左注（以下、「拾遺詞書」と略称する）の自立語語彙に関し、いささか考察を加えたものである。

考察をするに当たって問題になる単位語のとり方は、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（笠間書院刊、以下、『語い表』と略称する）⁽¹⁾における規定をおおむね使用させていただいた。また、語数調査に関しては、片桐洋一氏編『拾遺和歌集の研究 索引篇』（大学堂書店刊）⁽²⁾の学恩に浴した。なお、以下、語彙数に関して、特に注記しない場合は異なり語数である。

二 (1)

「拾遺詞書」の異なり語数・延べ語数を、筆者が以前調査した「古今和歌集」「後撰和歌集」の詞書・左注（以下、それぞれ「古今詞書」「後撰詞書」と略称する）⁽³⁾におけるそれらとともに示したものが表

(1)である。

表(1)でわかるように、「拾遺詞書」の異なり語数・延べ語数は、それぞれ、一二八六語、五二〇二語であり、その平均使用度数は四・〇五である。また、平均使用度数においては、三代集の中で最小であるが、異なり語数においては、「後撰詞書」よりも多いことも表(1)からわかる。換言すれば、延べ語数の割に異なり語数が多く、バラエティーに富んでいるとも言えそうである。

平均使用度数の点からみると、「拾遺詞書」は、「古今詞書」をおおむね踏襲し、「後撰詞書」の特異性を浮き彫りにする結果となっている。

表(1)

作品名	異なり語数	延べ語数	平均使用度数
古今詞書	892	3973	4.45
後撰詞書	1276	7002	5.49
拾遺詞書	1286	5202	4.05

若林俊英

(2)

次に、「拾遺詞書」の基幹語彙について考えることにする。

ある作品において、延べ語数のどの程度を占める語をもってその作品の基幹語とするかについては、様々な考え方があろうが、ここでは、延べ語数の一パーミル以上の度数を持つ語を、仮に基幹語としたい。

「拾遺詞書」において一パーミル以上の度数を持つ語は、異なり語数で一九一語、延べ語数で三四九二語となる。この延べ語数三四九二語は、「拾遺詞書」における全延べ語数五二〇二語の六七・一三パーセントに当たるが、筆者が以前調査した「後撰詞書」における七一・二七パーセント、「新古今和歌集」の詞書・左注(以下、「新古今詞書」と略称する)⁽⁴⁾における七一・四二パーセントと、比較的近い数値となっている。従って、この一九一語を「拾遺詞書」の基幹語彙とすることには、ある程度の妥当性があると考え、以下、考察に使用する。なお、資料として「拾遺詞書」の基幹語彙を頻度順に示したので、参照願いたい。

三一(1)

大野晋氏は、「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」(『国語学』八七集)において、「竹取物語」「伊勢物語」「源氏物語」等一〇作品の語彙により「平安時代和文脈系文学の基本語彙」(以下、「平安和文基本語彙」と略称する)を示されたが、以下、「拾遺詞書」の基幹語彙と、この「平安和文基本語彙」とを比較し、考察を加えることにする。

表(2)

は、西田直敏氏が「平家物語」においてなされた段階分け⁽⁵⁾とおおむね同様な方法により「拾遺詞書」の基幹語彙及び「平安和文基本語彙」を段階分けし、「拾遺詞書」の基幹語彙の所属段階をもとにして、両者の共通語数・非共通語数を各段階別に示したものである。なお、表(2)でわかるように、「拾遺詞書」の基幹語彙は⑦段階の一部までとなるが、「平安和文基本語彙」の方は、考察の都合上、⑧段階まで示した。また、段階分けをした場合、どの程度の所属段階差から、その使用が特異であるとみなすかについては議論の余地があるが、ここでは、その差が上・下各一段階までは許容範囲とし、二段階以上の所属段階差がある語をもって特徴的な使用例であるとみなした。

表(2)

段階	共通語数	「平安和文基本語彙」での段階								非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	2			1	1					1
2	5	1				2		2		
3	8	1	2		1	1	2		1	
4	13	2	1	1	2	5		1	1	3
5	30		2	3	3	11	1	5	5	4
6	38	1	2		6	7	7	10	5	16
7	54		1	4	4	7	12	14	12	17
計	150	5	8	9	17	33	22	32	24	41

(2)

表(2)でわかるように、「拾遺詞書」における所属段階の方が上位の語は、①段階二語、②段階四語、③段階四語、④段階二語、⑤段階一〇語、⑥段階五語の計二七語、「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語は、③段階一語、④段階三語、⑤段階五語、⑥段階九語、⑦段階一六語の計三四語であるが、以下、具体的に示す。

I 「拾遺詞書」における所属段階の方が上位のもの

「しる(知・領)」「とき(時)」「びやうぶ(屏風)」「よむ(詠)」「つかはす(遣)」「もと(元・本・下)」「をんな(女)」「いへ(家)」「まかる(罷)」「うた(歌)」「かへし(返)」「が(賀)」「かた(形)」「あそん(朝臣)」「くだる(下)」「なくなる(無)」「ある(或)」「ゑ(絵)」「あした(朝)」「め(妻・女)」「もみぢ(紅葉)」「さいみん(齋院)」「みやすどころ(御息所)」「おこす(遣)」「ながす(流)」「なぬか(七日)」「はづき(八月)」

II 「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位のもの

「ひと(人)」「あり(有)」「もの(物・者)」「こと(事)」「うち(内・内裏)」「なる(成)」「ひとびと(人人)」「また(副詞)」「みや(宮)」「おなじ(同)」「まへ(前)」「つく(付・着、下二段)」「なく(鳴、四段)」「ほど(程)」「わたる(渡)」「この(此)」「さぶらふ(候・侍)」「なし(無)」「あまた(数多)」「え(副詞)」「おもふ(思)」「かの(彼)」「かへる(帰)」「つかうまつる(仕)」「ふみ(文)」「いま(今)」「うへ(上)」「おほし(多)」「かく(斯)」「これ(此)」「ちゆうじやう(中将)」「まうす(申)」「めの

と(乳母)」「としごろ(年頃)」

ところで、宮島達夫氏は、『語い表』付載の統計表において、一四作品に共通する語として一三七語をあげておられるが、この一三七語と前掲各語群とはどのような関係になっているのであろうか。以下、具体的に示す。

一四作品共通語と共通する語は、Iにおいては「しる」「とき」「もと」の三語、IIにおいては「ひと」「あり」「もの」「こと」「うち」「なる」「また」「おなじ」「つく」「なく」「ほど」「わたる」「この」「なし」「あまた」「おもふ」「かの」「かへる」「いま」「おほし」「かく」「これ」の二三語となることがわかる。これからしても、「平安和文基本語彙」が和文の基層語として広く作品に使用されていた点、また逆に、「拾遺詞書」の語彙が一般の和文脈系文学の語彙とは異なった性格のものである点が指摘できるであろう。

(3)

次に、「拾遺詞書」における所属段階の方が上位の語群について、いささかふれる。

前記の語は、既述したように二七語であるが、これを分類すると、

I 和歌関係 「よむ」「うた」「かへし」

II 敬語 「つかはす」「まかる」

III 時・時間関係 「とき」「あした」「なぬか」「はづき」

IV 人物関係 「をんな」「あそん」「め」「さいみん」「みやすどころ」

V 場所関係 「もと」「いへ」

VIその他 「しる」「びやうぶ」「が」「かた」「くだる」「なくなる」

「ある」「ゑ」「もみぢ」「おこす」「ながす」

のようになる。この分類は、必ずしも厳密なものではないが、ここに所属する語の傾向をうかがうことはできるであろう。すなわち、詞書が、

和歌・俳句などの作者・制作の動機・日時・場所・場面・対象・

目的、その他前後の事情等について記し、また作品の主題・内容等について説明を加えたもの⁽⁶⁾

であることから考え、頻用されて当然と言えるものである。

筆者は、「後撰詞書」「新古今詞書」においても同様な調査を行い、

二つの「詞書」に共通する「つかはす」「かへし」「いへ」「まかる」

「あそん」「あした」の六語を「詞書」的性格の特に強い語であると

したが、これら六語が「拾遺詞書」においても、この二七語に所属していることは注目に値する。

(4)

次に、「平安和文基本語彙」と共通しない語群についてふれる。

前述の語としては四一語を指摘できるが、これを「拾遺詞書」における所屬段階の方が上位の語群において行ったのと同様に分類すると、

I和歌関係 「だい(題)」「うたあはせ(歌合)」「いひおこす

(言遣)」「かきつく(書付、下二段)」

II敬語 「いひつかはす(言遣)」「まうでく(詣来)」「まかり

かよふ(罷通)」「まかりくだる(罷下)」「まかりかく

る(罷隠)」

III時・時間関係 「えんぎ(延喜、年号)」「てんりやく(天曆、

年号)」「ね(子)」「つきなみ(月次)」「よねん

(四年)」「はじめて(始)」

IV人物関係

「ゑんゆうゐん(円融院)」「うだいじん(右大臣)」

「みなもと(源)」「さだいじん(左大臣)」「れんぎこ

う(廉義公)」「ていじ(亭子)」「うだいしやう(右大

将)」「せいしんこう(清慎公)」「あつただ(敦忠)」

「さだふん(定文)」「せつしやう(摂政)」「ふぢはら

(藤原)」「れいぜいゐん(冷泉院)」「もとよし(元良)」

V場所関係

「つくし(筑紫)」「みちのくに(陸奥)」「ほとり(辺)」

「うぶや(産屋)」「さんでう(三条)」「ふぢつば(藤

壺)」「をの(小野)」

VIその他

「けさう(懸想)」「しやうじ(障子)」「えん(宴)」

「やどる(宿)」「ごじふ(五十)」

のようになる。この分類によると、IV・Vに関する語が多いことがわかるが、やはり「詞書」の語彙の特色がよく表れている語群であると言える。

筆者は、「後撰詞書」「新古今詞書」においても同様な調査を行った。

それによると、「後撰詞書」においては三三語、「新古今詞書」においては三七語これに属していることがわかったが、これらの語群を、「拾遺詞書」を中心にして比較すると、「後撰詞書」との共通語が九語、

「新古今詞書」との共通語も九語存することがわかる。また、三作品に共通する語は、「だい」「うたあはせ」「かきつく」「えんぎ」「みちのくに」の五語であることもわかった。

右の五語のうち、時を示す「えんぎ」、場所を示す「みちのくに」を除く三語が和歌に関する語である点は注目に値する。これら三語は、時代を越えた典型的な「詞書」の語彙、すなわち、「詞書」の基層語とも言うべきものであろう。

次に、IIの敬語についてふれることにする。

「拾遺詞書」の基幹語彙のうち「平安和文基本語彙」と共通しないものは四一語、うち敬語関係は五語であることは既述した。この数値は、「新古今詞書」の場合(三七語中一語)と比較すると、非常に多いと言えるのであるが、一方、「後撰詞書」の場合(三三語中六語)と比較すると、必ずしも多いとは言えないものである。このように敬語の数の面から考えると、「拾遺詞書」における語彙は、「後撰詞書」におけるそれと比較的近い性格を持っていると言えるのである。

四―(1)

三―(1)において行ったのと同様な段階分けを「拾遺詞書」の全語彙について行い、各段階における語種別、品詞別語数をまとめたものが表(3)である。

以下、表(3)を使用し、品詞別、語種別に、その特色を考えることにする。

まず、品詞別特色についてふれる。

表(3)

段階	所属語数	語種別語数			品詞別語数									
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接統	感動	句等	
1	3	2	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2	5	4	1	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0
3	8	8	0	0	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0
4	16	13	3	0	13	3	0	0	0	0	0	0	0	0
5	34	30	4	0	21	11	0	0	1	1	0	0	0	0
6	54	40	13	1	35	13	4	0	1	1	0	0	0	0
7	128	95	28	5	85	34	3	0	4	2	0	0	0	0
8	118	87	27	4	83	29	4	0	2	0	0	0	0	0
9	208	163	41	4	164	34	5	2	3	0	0	0	0	0
10	712	551	140	21	541	132	17	9	8	0	0	1	4	
合計	1286	993	258	35	951	263	33	11	19	4	0	1	4	
	%	77.2	20.1	2.7	74.0	20.5	2.6	0.9	1.5	0.3	0.0	0.1	0.3	

表(3)でわかるように、「拾遺詞書」の名詞の比率は七四・〇パーセントであるが、これは「古今詞書」の六八・三パーセント、「新古今詞書」の七二・〇パーセントとほぼ同様の数値である。この数値は、かつてもふれた⁽⁸⁾ように、「語い表」所載の一四作品のどれよりも高いものである。一方、名詞以外についても、「拾遺詞書」は、「古今詞書」や「新古今詞書」の品詞構成比と類似している。

以上のような点において、「拾遺詞書」の語彙は、品詞構成比上、典型的な「詞書」の語彙であると言える。

次に、語種別特色について考えることにする。

全段階を通しての比率は、表(3)のように、和語七七・二パーセント、漢語二〇・一パーセント、混種語二・七パーセントとなっているが、和語についてみると、「古今詞書」(八九・〇パーセント)、「後撰詞書」(八七・九パーセント)と「新古今詞書」(七〇・五パーセント)との中間に位置することがわかる。

和語の七七・二パーセントという数値を『語い表』付載の統計表でものと比較すると、中世の作品である「方丈記」における比率(七八・〇パーセント)に近いものであることがわかった。一方、延べ語数で見ると、「拾遺詞書」は七八・五パーセントとなるが、この数値は、一四作品のどれよりも低いものであることもわかった。

(2)

(1)でみた「拾遺詞書」の和語の比率の低さは注目に値するものであるが、これは漢語の比率の高さと反比例の関係にあると思われるので、

以下、「拾遺詞書」における漢語について考えることにする。

表(4)は、「後撰詞書」と「拾遺詞書」における漢語の異なり語数・延べ語数を、各総数に対する比率とともに示したものである。

ところで、和文系文学作品において異なり語数での比率と延べ語数での比率を比較した場合、和語

では延べ語数での比率の方が高く、

漢語では、逆に、異なり語数での比率の方が高いと考えられる。⁽⁹⁾ところが、表(4)で示した「拾遺詞書」においては、異なり語数と延べ語数の比率がほぼ同じであり、これは非常に特徴的であると言える。また、表には示さなかったが、「拾遺詞書」の基幹語彙における漢語の異なり語数での比率は一八・三パーセント、「後撰詞書」のそれは七・二パーセントであり、その差の大きさも注目に値する。

右のような点から考えると、「拾遺詞書」と「後撰詞書」との漢語使用比率の相違は、全体を通してのそれよりも、基幹語彙におけるそれの方がより大きいと言えそうである。

では、「拾遺詞書」の基幹語彙における漢語(三五語存する)にはどのような傾向が見いだせるのであろうか。一言で言うと、人物に関する漢語が多いということである。つまり、「後撰詞書」の基幹語彙

表(4)

	後撰詞書	拾遺詞書
異なり語数	138	258
%	10.8	20.1
延べ語数	485	1045
%	6.9	20.1

における漢語との共通語六語を除いた二九語中、半分以上の一七語が人物関係となっているが、この人物に関する漢語の多用が全体の比率に影響を与えていると言えよう。

以上、「拾遺詞書」の漢語の比率の高さについてみてきたが、「拾遺詞書」の基幹語彙における人物に関する漢語の頻用は、歌物語的性格の強い「後撰詞書」と比較した場合、詠歌の事情の説明を中心とする簡潔な「詞書」らしい「詞書」としての「拾遺詞書」の性格を物語っているのではなからうか。

五

次に、「拾遺詞書」の語彙と、「古今詞書」「後撰詞書」「竹取物語」「伊勢物語」「源氏物語」「更級日記」「大鏡」「徒然草」の各作品の語彙との共通語・非共通語⁽¹⁰⁾についてみることにし、「拾遺詞書」の語彙の特色の一端にふれる。

表(5)は、「拾遺詞書」の語彙を中心とし、その共通語数・非共通語数、共通度⁽¹¹⁾についてまとめたものである。

以下、表(5)からわかることを示す。

I④段階あたりまでは共通語数にそれほど大きな差はないが、⑤段階あたりから「竹取物語」との共通語数が他作品のそれと比較した場合、少なくなる。

II下位段階においては、語彙量の大きい「源氏物語」との共通語数が圧倒的に多く、次いで、「大鏡」「徒然草」等、比較的語彙量の大きい作品との共通語数がそれに続く。

表(5)

段階	所属語数	古今詞書		後撰詞書		竹取物語		伊勢物語		源氏物語		更級日記		大鏡		徒然草	
		共通	非共通	共通	非共通	共通	非共通	共通	非共通	共通	非共通	共通	非共通	共通	非共通	共通	非共通
1	3	3	0	3	0	2	1	3	0	3	0	2	1	3	0	2	1
2	5	5	0	5	0	4	1	4	1	5	0	4	1	5	0	5	0
3	8	8	0	8	0	8	0	8	0	8	0	8	0	8	0	8	0
4	16	14	2	15	1	11	5	13	3	14	2	12	4	15	1	10	6
5	34	31	3	33	1	23	11	28	6	33	1	25	9	33	1	30	4
6	54	40	14	46	8	28	26	38	16	50	4	34	20	52	2	38	16
7	128	77	51	106	22	59	69	76	52	113	15	77	51	103	25	91	37
8	118	54	64	70	48	27	91	48	70	94	24	51	67	82	36	63	55
9	208	78	130	86	122	54	154	83	125	147	61	78	130	129	79	99	109
10	712	107	605	169	543	136	576	178	534	375	337	183	529	297	415	230	482
計	1286	417	869	541	745	352	934	479	807	842	444	474	812	727	559	576	710
共通度		0.24		0.27		0.16		0.19		0.07		0.17		0.14		0.12	

III全段階を通しての共通語数は、「源氏物語」「大鏡」「徒然草」に
 おいて多いが、それほど語彙量の大きくない「後撰詞書」や「伊
 勢物語」がそれに次ぐ点が目を引く。

IV共通度でみると、「後撰詞書」とのそれが最も高く、以下、「古今
 詞書」「伊勢物語」の順となる。

以上のような点が指摘できるが、IVでもふれたように、「拾遺詞書」
 の語彙と歌物語である「伊勢物語」の語彙との共通度が比較的高い点
 は注意を要する。ただし、「後撰詞書」と「伊勢物語」とのそれが○・
 二四⁽¹²⁾である点から考えれば、その共通度は低いとも言える。

また、「後撰詞書」における同様な調査と比較した場合、すべての作
 品において「拾遺詞書」での共通度の方が低い。この点に、散文的要
 素を持った「後撰詞書」と、その要素のより少ない「拾遺詞書」との
 差がみうけられると言えそうである。

六

前節において、「拾遺詞書」の語彙と「伊勢物語」の語彙との共通
 度は比較的高いものの、「後撰詞書」の語彙と「伊勢物語」の語彙と
 のそれには及ばないことについてふれた。ここでは、「伊勢物語」の
 語彙と「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」の語彙との順位相関をみ
 ることにより、「伊勢物語」の語彙と「後撰詞書」の語彙との類似性
 を指摘したい。

前述のことをするに当たっては、『語い表』付載の「伊勢物語」に
 関する「上位五〇語の使用度数と使用率」で示された五〇語のうち、

「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」のいずれの「詞書」においても
 使用された四一語を考察の対象とした。

右の四一語に関し、「伊勢物語」を中心にして、使用頻度により順
 位づけしたものが表(6)である。この表(6)をもとにし、スピア
 マンの計算式⁽¹³⁾により順位相関係数を計算したところ、「伊勢物語」
 と「古今詞書」との間が○・二七九、「伊勢物語」と「後撰詞書」と
 の間が○・五二〇、「伊勢物語」と「拾遺詞書」との間が○・三四七
 のようになった。これで見ると、「伊勢物語」と「古今詞書」、「伊
 勢物語」と「拾遺詞書」との間には、それぞれ強い相関は認められな
 い。また、「伊勢物語」と「後撰詞書」との間の相関も、必ずしも強
 いとは言えないものであるが、「伊勢物語」と他の二つの「詞書」と
 の相関と比較した場合、やはりその差は歴然としている。

七

以上、「拾遺詞書」の語彙について、いくつかの観点から、いささ
 かの考察を試みたが、ここで要点を示すことにより、まとめたい。

1 「拾遺詞書」の語彙における異なり語数は一二八六語、延べ語数
 は五二〇二語である。

2 延べ語数の一パーミル以上の度数を持つ語を「拾遺詞書」の基幹
 語とすると、基幹語彙は、異なり語数で一九一語、延べ語数で三
 四九二語となる。また、この延べ語数三四九二語は、「拾遺詞書」
 における全延べ語数の六七・一三パーセントに当たる。

3 「拾遺詞書」の基幹語彙のうち「平安和文基本語彙」と共通しな

表(6)

No.	単語	伊勢	古今	後撰	拾遺	No.	単語	伊勢	古今	後撰	拾遺
1	あり	1	20	9	13	22	あふ(合)	21.5	32.5	19.5	21
2	をとこ	2	32.5	7	15.5	23	とき	23	2	13	2
3	ひと(人)	3	4	1	7	24	くに	24	13	23	23.5
4	むかし	4	29.5	37.5	40.5	25	しる	25	5	6	1
5	をんな	5	15	2	6	26	ところ	26	16.5	12	8
6	いふ	6	6	5	10.5	27	かへし	27	14	3	14
7	す(為)	7	10	8	3	28	よ(夜)	28	22	30	40.5
8	おもふ	8	26.5	21	27	29	なく(泣)	29.5	24	40	22
9	よむ	9	1	25	4	30	いづ	29.5	40.5	36	33.5
10	なし(無)	10	25	24	25	31	み(身)	32	18.5	27.5	33.5
11	みる	11	7	16	9	32	きく(聞)	32	16.5	14	20
12	いと(甚)	12	29.5	22	37	33	いま	32	38.5	33.5	29.5
13	この	13	11	33.5	23.5	34	みこ	34.5	9	19.5	18
14	こと	14	29.5	10	17	35	かの	34.5	22	26	27
15	もの	15.5	22	11	15.5	36	ふ(経)	37	36	35	39
16	こころ	15.5	35	15	33.5	37	はな(花)	37	8	17.5	12
17	なる	17	18.5	17.5	19	38	え(得)	37	34	30	27
18	その	18.5	26.5	27.5	33.5	39	よ(世)	39	40.5	41	37
19	く(来)	18.5	37	30	37	40	これ	40.5	29.5	39	31
20	もと	20	12	4	5	41	かく(斯)	40.5	38.5	37.5	29.5
21	うた	21.5	3	32	10.5						

いものは「詞書」の語彙を特色づけるものであり、その中には「詞書」の基層語とでも言うべきものが含まれている。

4 敬語使用の面からみると、「拾遺詞書」は「古今詞書」よりも「後撰詞書」に近いと言えそうである。

5 「拾遺詞書」の語彙は、品詞構成比上、「古今詞書」や「新古今詞書」に類似している。

6 語種別比率でみると、「拾遺詞書」の語彙は、三代集の「詞書」の中で最も漢語の比率が高い。また、漢語の異なり語数における比率と延べ語数におけるそれとを比較すると、ほとんど差がないが、この点は非常に特徴的である。

7 6でもふれた延べ語数における漢語の比率の高さは、基幹語彙における人物関係の漢語の頻用に起因していると思われる。また、それは、「拾遺詞書」と「後撰詞書」

との性格の違いを端的に示しているとも考えられる。

8 「拾遺詞書」の語彙と他作品の語彙との全段階を通しての共通語数は、語彙量の大きい「源氏物語」「大鏡」「徒然草」において多いが、語彙量のそれほど大きくない「後撰詞書」や「伊勢物語」での共通語数がそれらに次ぐ点は注目に値する。

9 共通度は、「後撰詞書」とのそれが最も高く、以下、「古今詞書」「伊勢物語」の順となる。

10 順位相関係数で見ると、「伊勢物語」の語彙と「後撰詞書」の語彙との間には、比較的強い相関が認められる。

(注)

(1) 以下、用例や統計に関して『語い表』とした場合は、宮島達夫・

中野洋・鈴木泰・石井久雄氏編『フロッピー版 古典対照語い表 および使用法』による。

(2) ただし、私意により読みを改めた箇所がある。

(3) 拙稿Ⅰ「古今和歌集」詞書の語彙について(『湘南文学』一七号)、Ⅱ「後撰和歌集」の「詞書」の語彙について(『此島正年博士喜寿記念語彙語法論叢』所収)。以下、「古今和歌集」及び「後撰和歌集」に関しては、それぞれ前掲のものによる。なお、語数・比率に関しては、調査対象範囲及び読み方変更による再調査の結果、その数値に異動がある。

(4) 拙稿「新古今和歌集」の「詞書」の語彙について(『湘南文学』一九号)。以下、「新古今和歌集」に関しては前掲のものによる。なお、読み方変更による再調査の結果、数値に一部異動がある。

(5) 西田直敏氏著『平家物語の文体論的研究』八四頁。

(6) 国語学会編『国語学大辞典』の「詞書・左注」の項(井手至氏担

当)。

(7) (3) 拙稿Ⅱ。

(8) (3) 拙稿Ⅱ。

(9) 『語い表』の一四作品においても全て、和語では延べ語数での、漢語では異なり語数での比率の方が、それぞれ高くなっている。また、現代語及び話しことばにおいても同様なことは言えそうである(石綿敏雄氏著『日本語のなかの外国語』第二章参照)。

(10) 「竹取物語」以下六作品における語の有無は『語い表』によった。

(11) 共通度は、水谷静夫氏が「語彙の共通度について」(『計量国語学』七号)で示された計算式によった。

(12) (3) 拙稿Ⅱ。

(13) 田中章夫氏「語彙研究における順位の扱い」(『国語語彙史の研究』七)所収)に示されているものによった。

(資料) 「拾遺詞書」の基幹語彙

順位	単語	度数	順位	単語	度数
一	だい	一九八	二六	うたあはせ	二七
二	しる	一九二	二七	のち	二六
三	とき	一五〇	二八	かく	二五
四	びやうぶ	一三二	二九	こと	二五
五	す	九九	三〇	つき	二四
六	よむ	九八	三一	ひ	二四
七	つかはす	九六	三二	みこ	二四
八	もと	九三	三三	いひつかはす	二三
九	をんな	七八	三四	ころ	二三
十	ひと	七六	三五	うち	二三
一一	いへ	六九	三六	かみ	二二
一二	まかる	六九	三七	なる	二二
一三	ところ	六六	三八	きく	一九
一四	みる	六二	三九	ひとひと	一九
一五	いふ	五七	四〇	かた	一八
一六	うた	五七	四一	あそん	一七
一七	はべり	四四	四二	くだる	一七
一八	えんぎ	四一	四三	なくなる	一七
一九	はな	三八	四四	ある	一六
二〇	あり	三六	四五	とし	一六
二一	てんりやく	三六	四六	とふ	一六
二二	かへし	三二	四七	よる	一六
二三	が	二八	四八	ゑ	一六
二四	もの	二八	四九	あした	一五
二五	をとこ	二八	五〇	まうでく	一五
	男物者			詣来	
	賀返年号			朝絵夜訪問	
	有花年号			年或無下	
	侍歌言見			朝臣形人人	
	所罷家			聞成上守	
	内裏			頃	
	元本下			言遣	
	遺詠			親王	
	為屏風			日月	
	時知領			事後	
	題			歌合	

順位	単語	度数	順位	単語	度数
五一	また	一五	七七	つく	一〇
五二	むすめ	一五	七八	なく	一〇
五三	あき	一四	七九	にようこ	一〇
五四	さいわん	一四	八〇	ね	一〇
五五	たてまつる	一四	八一	ほど	一〇
五六	なか	一四	八二	まうづ	一〇
五七	みや	一四	八三	みやすどころ	一〇
五八	め	一四	八四	わたる	一〇
五九	もみぢ	一四	八五	おこす	九
六〇	あん	一四	八六	くに	九
六一	ゑんゆうあん	一四	八七	この	九
六二	あふ	一三	八八	さだいじん	九
六三	かきつく	一三	八九	とる	九
六四	しのぶ	一三	九〇	はる	九
六五	みち	一三	九一	れんぎこう	九
六六	やま	一三	九二	をのこ	九
六七	こ	一二	九三	おくる	八
六八	ちゆうぐう	一二	九四	かへりごと	八
六九	ほふし	一二	九五	けさう	八
七〇	うだいじん	一一	九六	さぶらふ	八
七一	うま	一一	九七	しやうじ	八
七二	おなじ	一一	九八	つきなみ	八
七三	さくら	一一	九九	ていじ	八
七四	ひさし	一一	一〇〇	とうぐう	八
七五	まへ	一一	一〇一	なし	八
七六	みなもと	一一	一〇二	はづき	八
	人名			八月	
	前久桜同馬			無春宮	
	右大臣法師			亭子月並	
	中宮			障子候侍	
	子山道			懸想返言	
	偲忍書付			後男	
	合逢			人名	
	円融院			春取	
	院			左大臣	
	紅葉			此国	
	妻女			遣渡	
	宮			御息所	
	中仲			詣程	
	奉四段			子御	
	齋院			鳴四段	
	秋			附着	
	娘				
	又				

順位	単語	度数
一〇三	ふる	八
一〇四	よねん	八
一〇五	うぐひす	七
一〇六	うだいしやう	七
一〇七	えん	七
一〇八	おもしろし	七
一〇九	さらに	七
一一〇	すけ	七
一一一	せいしんこう	七
一一二	たまふ	七
一一三	つくし	七
一一四	つくる	七
一一五	ながす	七
一一六	なぬか	七
一一七	はは	七
一一八	みちのくに	七
一一九	やどる	七
一二〇	ゆき	七
一二一	あかし	六
一二二	あつただ	六
一二三	あふぎ	六
一二四	あまた	六
一二五	いけ	六
一二六	いせ	六
一二七	いちでう	六
一二八	うめ	六
梅		
地名		
地名		
池		
数多		
扇		
人名		
赤明		
雪		
宿		
地名		
母		
七日		
流		
作		
地名		
給		
人名		
次官		
更		
面白		
宴		
石大将		
四年		
降		
順位	単語	度数
一二九	え	六
一三〇	おほす	六
一三一	おもふ	六
一三二	かの	六
一三三	かへる	六
一三四	き	六
一三五	さいぐう	六
一三六	さだふん	六
一三七	さつき	六
一三八	せうしやう	六
一三九	せつしやう	六
一四〇	せんざい	六
一四一	そうす	六
一四二	ちゆうなごん	六
一四三	つかうまつる	六
一四四	つかさ	六
一四五	てんじやう	六
一四六	ないし	六
一四七	ながつき	六
一四八	なげく	六
一四九	のほる	六
一五〇	のる	六
一五一	ふぢはら	六
一五二	ふみ	六
一五三	ふみつぎ	六
一五四	ほととぎす	六
時鳥		
七月		
文		
人名		
乗		
上登昇		
嘆		
九月		
内侍		
殿上		
官司		
仕		
中納言		
奏		
前裁		
撰政		
少将		
五月		
人名		
齋宮		
木		
婦		
彼		
思		
仰		

順位	単語	度数
一五五	ほとり	六
一五六	まかりかよふ	六
一五七	まかりくだる	六
一五八	みゆき	六
一五九	れいぜいみん	六
一六〇	あめ	六
一六一	いひおこす	五
一六二	いま	五
一六三	うぶや	五
一六四	うへ	五
一六五	おく	五
一六六	おほし	五
一六七	かく	五
一六八	かはらけ	五
一六九	かむなづき	五
一七〇	きやう	五
一七一	こたふ	五
一七二	これ	五
一七三	ごじふ	五
一七四	さく	五
一七五	さんでう	五
一七六	すむ	五
一七七	そふ	五
一七八	ちゆうじやう	五
一七九	つかひ	五
一八〇	としごろ	五
年頃		
使		
中将		
添		
住		
地名		
咲		
五十		
此		
答		
京		
十月		
士器		
斯		
多		
置		
上		
産屋		
今		
言遣		
雨		
冷泉院		
御幸		
寵下		
寵通		
辺		
順位	単語	度数
一八一	はじめて	五
一八二	ふぢつほ	五
一八三	まうす	五
一八四	まかりかくる	五
一八五	まつ	五
一八六	まつり	五
一八七	みかど	五
一八八	めのと	五
一八九	もとよし	五
一九〇	をの	五
一九一	をる	五
折		
地名		
人名		
乳母		
御門		
祭		
待		
寵隠		
申		
藤壺		
始		